

山家集巻尾百首について

村 井 董 直

岡山理科大学 教養部

(昭和59年9月27日受理)

1. はじめに
2. 西行の出家生活
3. 「ちさと」と「ふたむら」
4. 花十首の配列について
5. おわりに

1. はじめに

私がここで試みることは、西行の山家集の巻尾にある「百首」のうち2首の解釈ならびに歌の配列についてである。従来、この「百首」をめぐるいろいろな論ぜられてきた。その論点は西行(1118～1190)の生涯のうちいつごろに成立したものであるか、また、それぞれの歌をどう評価したらよいかに尽きると思う。それを要約すれば次のようである。

- (1)「余程若い時分、即ち出家前の作と見え、幼稚である。」(尾山篤二郎編、創元文庫本『西行法師全歌集』)
- (2)「その調より見るも、猶年少の時代に成れるものか。」(佐々木信綱等編『西行全集』)
- (3)「出家後数年、遁世者としての心境を育てながら、作歌勉強にも打ち込んでいた頃のものとして第二期の業績としてとり上げようと思う。」(窪田章一郎著『西行の研究』)
- (4)「比較的若年の頃の作と思われる。」(三好英二校注『新註国文学叢書』)
- (5)「この百首の作年を決めることは至難だと思ふ。相当の年月にわたった作品が混在すると観るべきではなかろうか。」(川田順著『西行の伝と歌』)
- (6)「聞書集成立の後であり、両宮歌合成立の前であると推測される。」(山木幸一『国語国文研究』38号)

等であり、最近では岩波書店発行の「文学」51巻10号に久保田淳氏が、そして同誌52巻5号に山木幸一氏が、いずれもこの「百首」を論じておられる。「百首研究史」と考えるなら、成立年代は少しずつ下ってきているようであるが、幼稚とか、稚拙とかいう先入観は今もって根強いものがある。私も以上の諸論文を読み大いに益するところがあった。それぞれに綿密な研究の成果であって高く評価されて然るべきと思う。ところで一つ気になる

ことは、一首の歌、あるいは連作ものを通じて「余程若い時分」「幼稚である」「その調より見るも」「比較的弱年」ということについてである。どういうコトバなり、あるいはコトバとコトバのどういうつながりなどから、このようなことが言えるのだろうか。優れた直観力、批評眼を持たない私にとって無理からぬことと思うが、私の和歌に対する態度は、その歌の心といおうか、作者の表現意図といおうか、それを究明することが最重要だと考えている。それがためにコトバとコトバの論理的展開をたどり、コトバの意味を明らかにして解釈するという作業がなされねばならない。三十一字の歌は、ある程度、その人の直観力によって理解されようが、それはあくまで鑑賞の領域であって学としては成り立たない。いうまでもなく優れた研究者は優れた批評家であり、優れた鑑賞者でなければならない。そういう意味で前記要約に示した先達に敬意をはらいつつ、なお、「百首」の若干の歌についてその表現意図を私なりに汲んでみようとするのがこの小論の目的である。

2. 西行の出家生活

ここに西行の生涯について述べておきたい。詳細なことは拙稿(岡山理科大学紀要19号B)にゆずるが、この小論と関係あることについてのみ記すこととする。

西行は藤原俊成におくれること4年、元永元年(1118)に生まれ、平清盛と生年を同じくし、保延6年(1140)に出家、爾来50年の年月を経て「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃」と詠んで釈迦入滅と同じ日に死にたいという望みどおり文治6年2月16日(1190)に旅先の地河内国弘川寺で73才の生涯を終えている。彼が出家した時、台記には人々これを嘆美すとあるが¹⁾、彼の死に際しても拾遺愚草は「をはりみだれず」と記し、また、俊成・定家・慈円・公衡らはそれに感動して歌を詠んだりしている。まことに稀な生涯といえよう。それだけ人を魅了させるなにかを持っていたと思われる。それは今日残されている次の評によってもわかる。すなわち、俊成は彼の歌を評して「心深く」「詞をかざらず」(御裳濯河歌合)と述べ、その子定家は「句ごとに思ひ入れて作者の心深くなやませる所侍る」(宮河歌合)点に真価を見出し、後鳥羽院御口伝では「西行はおもしろくて、しかも心もことに深くてあはれなる、有難く出来がたきかたも相かねて見ゆ、生得の歌人とおぼゆ。これによりておぼろげの人のまねびなんどすべき歌にあらず、不可説の上手なり」と。また、八雲御抄にも「唯詞をかざらずして、ふつふつといひたるが聞きよきなり」と、いずれも彼の特色を示唆したものといえよう。出家後50年間という長い年月、京都歌壇とほとんど交渉をもち、したがって歌会にも出席したことはなく、わずかに西住や寂念ら心からの友との交わりはあったものの²⁾、すべては隠遁孤独の中にあって清潔な人間の追求に余念がなかったといってもよからう。俊成とは若い頃から交渉があったらしいが、63才の時、寂蓮勧進の百首歌を詠んでいること、69才の時、定家・隆信・寂蓮・慈円・家隆・公衡・長方らに百首歌を勧進していること、70才の時に自歌合の判を俊成及び定家に乞うているくらいである。そういうことのためかどうかは軽々しく論ず

ることはできないが、彼が出家して10年後に撰進された詞花集には「読み人しらず」として「世を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ」の1首だけが入集されているのかかわらず、70才の時に撰進された千載集には18首が入集し、死後15年にして撰進された新古今集には94首という同集最高の入集歌数となっている³⁾。西行と生年を同じくする清盛、おそらくは在俗時、ともに北面の武士として相識の間であったろうが、その清盛が覇者の道をひた走りに走り、西行の死に先だつ9年前あえなく悶死したことと対照的であったといえよう。こうして73年の生涯を通じて彼が詠んだ歌は2088首⁴⁾といわれる。それらは重複するものもあるが、家集として山家集・西行上人集・山家心中集・聞書集・聞書残集に収められている。この家集のうち山家集の巻尾の百首歌のうち若干の歌につき次に述べることとする。

3. 「ちさと」と「ふたむら」

百首の「月十首」の5番目の歌に

思ひ解けば千里の影も数ならず到らぬ隈も月にあらせじ(1477)(大系本山家集の番号、以下同じ)

がある。大系本の注には「『千里』を紀伊国日高郡の海浜の名とみて、それに距離を示す『千里』をかけていると見る説もある。『秦甸之一千余里凜々氷舗』(和漢朗詠集)」とある。こうした意味の注はただに大系本ばかりでなく尾山篤二郎氏編著の「西行法師全集」をはじめとして、多くの注釈書が紀伊国日高郡岩代の千里の浜に照る月を詠んだ歌と考え、その出典を和漢朗詠集に求めている。大系本の注もこれらに拠ったものと思われる。それでは和漢朗詠集はどうなっているかという本文は次のようである。

「秦甸しんでんの一千余里 凜々りんとして氷舗しき 漢家の三十六宮 澄々ちようとして粉粧ふんかざれり」

(十五夜つけたり 月 240)

がそれである。因みに口語訳をすれば「八月十五夜の月光に照らし出された長安の都のさま。都をめぐる畿内千里の地は氷を敷きつめたごとくさやかに輝き渡り、漢の代以来の三十六の宮殿は澄みとおって粉粧をこらして冴えている。」ということになる。平安時代にはこの詩がよく人々の口に上ったらしく

「月のかげのはしたなさに、うしろざまにすべり入るを、つねにひき寄せ、あらはになされてわぶるもをかし。『凜々として氷舗けり』といふことを、かへすがへす誦しておはするは……」(枕草子 302段)

とあって、女が月かげに照らし出されて顔があらわになることに当惑している場面に引用されている。また、

「月の夜めでたきに、りんりんとして氷しきといふうたいと花やかなる声してうたひけるが……」(今鏡九)

とあり、これも月の輝く夜の、それにふさわしい詩として詠みあげられていることがわか

る。大系本の注にこの詩を引用する理由の一つがこの辺にあるのだろうか。そうした解釈をするもう一つの理由は「千里のかげ」の「千里」にあるのかもしれない。

「浜は有渡^{うと}浜，長浜，吹上の浜，打出の浜，もろよせの浜，千里の浜，広う思ひやらるる」(枕草子 205 段)

ここでいう千里の浜は紀伊国日高郡磐白(岩代)の浜をさしていることは疑う余地もない。すると、この二つから千里の浜に照る月の夜の光景を詠んだもの、それは和漢朗詠集にもあり、人々の口にも容易に上ったものであるから西行もそれらを意識して詠んだのではないかと判断したのではなかろうか。ここに私は疑問をもつ。西行の歌は月はすべてを照らす、どこにも月光をうけないものはないという意の中に、自らの心を清澄の月の光と見比べて深い自虐の思いにかられている心の歌ではないだろうか。でない「思ひ解けば」「月にあらせじ」が宙に浮いてしまうのではないか。対する和漢朗詠集のそれは長安の都の月に映えて氷を敷きつめたような月光の光景を詠んでいる。そうするとこの二つの間にどういう対応関係があるのだろうか。一つの例を引いてみよう。

「法性寺にて十首歌人々よみ侍りけるに月の歌とて

月きよき都の秋を見渡せば千里にしける氷なりけり」

という皇太后宮俊成の作が玄玉集にある。この歌は「月きよみ」となって万代集にも入れられている。この歌こそ和漢朗詠集と軌を一にする歌で翻案による叙景歌と思われる。それにしても俊成歌の「千里」は千里の浜とは考えられない。また「ちさと」という語は以前にはあまり歌われていないようである。年代がはっきりしているものを夫木抄から拾ってみると、

月きよみ四方の大空雲消えて千里の秋をうづむ白雪

これは定家が文治 5 年(1189)の百首に、

月きよみ千里の外に雲つきて都の方に衣うつなり

これは俊成が文治 6 年(1190)の五社百首に、

さらしなの山のたかねに月さえてふもとの雪はちさとにぞしく

これは後京極摂政が正治 2 年(1200)百首に詠んでいるが、ここでいう「ちさと」が千里の浜とは考えられない。僅かに固有名詞として詠まれているものとしては

すゑ遠き千里の浜に日は暮れて秋風おくる岩代の松

という寂蓮の歌が夫木抄にあるくらいで、これとて月明の歌ではない。いうまでもなく西行は千里の浜を修行の往還に通ったことだろう。なぜなら、代々佐藤家は田仲庄の住人として在地領主の資格をもって紀伊国那賀郡という紀ノ川北岸に広大な土地を所領していたからである。こうした背景から「千里のかげ」がそのまま「千里の浜」へ結びつけたのではなかろうか。私はそういう解釈に近代的な合理主義の立場を感ずる。先入観が強すぎたのではないか。

次に山家集百首の「雪十首」の 8 番目の歌に

晴れやらで二村山にたつ雲は比良の吹雪の名残りなりけり (1490)

の二村山について考えてみたい。この歌について大系本の頭注には「不詳、近江の国にあるか。」とある。そこで二村山を詠じた歌を拾ってみる。まず勅撰集である。初出は後撰集にある。恋歌三の(713)(714)の贈答がそれである。作者は清原諸実。

「おほやけづかひにて東の方へまかりけるほどに、はじめてあひしりて侍る女に、かくやむごとなき道なれば心にもあらずまかりぬるなど申して下り侍りけるを、後に改め定めらるる事ありて召しかへされければ、此女聞きて喜びながらとひにつかはしたりければ、道にて人の心ざし送りてはべりけるくれはとりといふ綾を二村包みて遣しける
呉服部あやに恋しくありしかば二村山も越えずなりにき

かへし

から衣たつを惜しみし心こそ二村山のせきとなりけめ」

がある。これをはじめとして千載集夏歌に権中納言俊忠の歌(国歌大観千載193)、続古今集夏歌に順徳院御歌(同、続古今253)、同じ集羈旅歌(880)に「都にのぼるとて二村山を越えけるによめる」とある前右大将頼朝の歌、時代は少し下るが、新千載集羈旅歌(808)に「都に登り侍りける時二村山を越ゆとてよめる」とある藤原行朝の歌などがある。この中で清原諸実と頼朝と行朝の3首の詞書から推して二村山は京都以東の地にある山と考えられる。その他の歌からは所在まではわからない。次に家集その他ではどうであろうか。前記清原諸実の贈答歌は古今六帖にあり、頼朝の歌は万代集にあるので省略するとして、夫木抄から次の歌を拾うことができる。すなわち、源重之(国歌大観、夫木、5627)俊頼(同、2862, 15638)俊忠(同、2218)寂念(同、6213)正家(同、8635)が二村山を詠んでいることがわかる。そのうち藤原正家の歌は天仁元年(1108)の大嘗会の歌で「しづかなる二村山やふもとにぞちとせの秋の花も咲きける」とあり、その冒頭に「二村 参河又丹波或尾張」と書かれているので、二村山は参河か、丹波か、尾張かの三か所にあったものと思われる。さきの勅撰集などはおそらく丹波を除く二地方のいずれかだろう。それと同じように夫木抄の源重之の詞書にも「みちの国へくだりけるにふたむら山にて」とあり、この二村山も参河か尾張かと思われる。大系本にある「近江の国にあるか」という根拠はどうも見当らない。そして、尾張説、参河説のどちらかといえ、時代はぐっと後になるが

「ふたむらのさと 尾張 宝治二年百首 里竹

たが代より植ゑてこの名をとどめけむそのふの竹のふたむらの里」

が冷泉太政大臣の作として夫木抄にある。宝治2年といえ、西行死して57年になる1248年である。この時すでに「ふたむら」の名をもつこの里は園生に繁る竹の里として有名であったといえよう。しかも尾張とある。してみれば私の問題とする二村山は参河にある山ではなかったかと思う。どうみても近江ではありえない。そこで一考したいのが前記後撰集にある清原諸実と「あひ知りて侍る」女との贈答歌である。その詞書に「くれはとりといふ綾を二村包みて遣しける」とある「くれはとり」は周知のように「呉織」であって現在

の反物のことである。また「ふたむら」とあるから反物二反ということになる。つまり女との別れに際し反物二反を贈ったというのである。あたかもその地が二村山を背にした処であったから、それにひきかけたものと思われる。このことが、二村山を世間に宣伝するものになったのではないか。なるほど勅撰集を見ても、夫木抄に見える歌にしても作歌の素因は秋の花、虫の声、ほととぎす、いはつつじ等であって、めまぐるしく変わっているのに、変わらない表現が一つある。それは反物又は衣に関することである。前記の歌に関してみると源重之が「秋風にはたおる虫」、源俊頼が「くれはとり」、俊忠の「折りそめしからにしき」藤原為忠の「唐錦……たつ」の縁語等がそれである。つまり二村山を詠むときに反物・衣に関する語が詠みこまれているということになる。そうして多少時代は下るが藤原経衡の歌を参考としたい。この歌は夫木抄にも万代集にもある歌だが

「ふたむら山を越ゆとて衣の里をみやりて

ほどこかくころもの里はなりぬらむふたむら山を越えてきつれば」

がそれである。二村山の麓に衣の里があったことが知られる。同じ夫木抄(8639)に源光行の作として、

「此歌は二むら山をこゆとて、ころものさとをみやりてよめる云々 東にくだりける道にて

玉くしげ二村山のほのぼのとあけゆくすゑは浪路なりけり

此歌路次記云 夜のうちに二村山にかかりて山中どこえすぐる程に ひがしやうやうしらみて海のおもてややあらはれわたり 波も空もひとつにて山につづきたるやうにみゆると云々」

があるが、これによると、さらに地形がはっきりとしている。すなわち二村山から衣の里が見えるし、海を眺望することができる地である。こうした歌から二村山と衣の里は離し難い故事があると推定すべきではないか。それを私は後撰集の清原諸実の歌に求めたいのである。新潮日本古典集成本に「或いは固有名詞ではなく、反物を二むら(反)しきならべたごとく立っている雪雲の形容か」とあるが、それがどういう根拠からきたのか知り得ないが、私は以上のことからこの説を支持したい。なお、反物を二つ敷きならべた状態を「ふたむら」というのは、夫木抄に春御歌中の歌(2269)に作者不詳で

東路の山にや春の残るらむふたむら見ゆる花の色かな

があり解釈に無理はないと思う。こう考えると「晴れやらで」の歌で二村山にたつ雲は比良山の吹雪の名残りだと歌っている以上、二村山は比良山の近くでなければならないとする通説から更に一步進んで二村山は近江になくてはならないという説にまで発展していることに私は疑問を感じる。比良山の吹雪の名残りが空に衣を敷きならべたように二つ浮かんでいるとすべきではないか、私はその方がより深化した歌となると考えたい。

4. 花十首の配列について

すでに記した西行の家集のなかでは、山家心中集が古くから西行の作品の精粹を集めたものといわれている。その形態は自詠 360 首，他人歌14首を収めた妙法院蔵本のものを基幹として彼みずからが加除訂正をしたものが諸本として伝わったらしい。その成立については、この集の末尾の贈答歌が一つの根拠となっている。それによると、成立の契機は藤原俊成の求めにあったらしく、贈答歌に「右京大夫俊成」とある。俊成が右京大夫在官時は仁安3年(1168)から承安5年(1175)であるから、俊成55才から62才の頃、従って西行51才から58才の頃である。自撰か他撰かということは断定し難いが、全体としては花・月・恋の三題にそれぞれ36首を配し、残りを雑上下に組み立てている。すでに西行には西行上人集という家集があることは記したが、心中集の花36首のうち35首が上人集の花76首に含まれているようで⁵⁾、家集相互に重複するものも多いということである。いずれも、花を待ちこがれる冒頭歌にはじまって、花の盛り、散りゆく花、落花の心を季節の推移とともに配列してゆく構成になっている。客観的な時間の推移に従って、主体的な作者の感情をごく自然に配列されているといつてよい。そこで巻尾百首、山家心中集、西行上人集の主として花部の冒頭歌とそれに続く歌とを抜き書きして比較検討したい。いうまでもなく歌一首はそれ自体において完結性をもっていることはもちろんのことではあるが、連作のような形式をとっている以上連続性ということも重視しなくてはならないという考えからである。

巻尾百首の花十首の冒頭とその次は、

(1)吉野山花の散りにし木の下に留めし心はわれを待つらん

(2)吉野山高嶺の桜咲き初めばかからんものか花の薄雪

山家心中集のそれは、

(3)何となく春になりぬと聞く日より心にかかるみよしの山

(4)山寒み花咲くべくもなかりけりあまりかねても尋ねきにける

西行上人集のそれは、

(5)君こずは霞にけふも暮れなまし花待ちかぬる物語せよ

(6)吉野山桜が枝に雪散りて花おそげなる年にもあるかな

がそれである。花にあこがれ、花に集中する心は3・4・5・6が強いようである。花が心にかかり、じっと傍観しておれず山に尋ね入る行為となって心をゆさぶる。あるいはまた、はやる心を友人に求めて花物語をしようとし、それにしても花遅げなこの年をかこつ。すべてが花に集約され、花に凝縮する。こうした心中・上人の両集に対して百首はどうであろうか。1と3とをみると「心」という語が共通している。しかし大きい違いがある。「留めし心」とはその前年に花の名残りを惜しんで、その花の下に残しておいた自分の命ともいうべき心である。「散りにし」桜の木、その下においた「留めし心」へと回帰のくりかえしである。それが私を待っているだろうと考え、吉野山に花の薄雪がかかることを願うという、いずれも3, 4, 5, 6と比べてゆとりをもった、花を客観視する姿勢から始

まる。1も2も初五は「吉野山」であり、1首のなかに過去の助動詞が二度にわたって使用されていることなど批判されるべきところもないではないが、3, 4, 5, 6が動的・行為的とすれば1, 2は静的・回帰的といつてよいだろう。それはそのまま後続の歌に影響していく。例えば、心中集ではその8番目に「吉野山梢の花を見し日より心は身にも添はずなりにき」と花ゆえに心と身との分離、10番目「花にそむ心のいかで残りけむ捨てはててきと思ふわが身に」と自省とも悔恨とも思われる歌に続き、11番目には有名な「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃」つづいて12番目に「仏には桜の花をたてまつれわが後の世を人とぶらはば」となっている。ここに至って分裂しかけていた身も心も、すっかり花に凝縮し、花に埋没してしまう。私はさきに自省と悔恨といったが、それは12番目の歌の「仏」を自分の死後ではなくて、釈迦に桜の花をささげてくれ、そうすることによって出家したにもかかわらず自省と悔恨をもつ己れの罪業を滅することになるのだからという解釈によって自省悔恨の語を使ったわけである。さて花は散りこそすれ決して枯れない。22番目に「峰に散る花は谷なる木にぞ咲くいたくいとほじ春の山風」ついで23番目の「あだに散る梢の花をながむれば庭には消えぬ雪ぞ積れる」とつづく。花は散ることによってその生を終えるが、ここでは落花は生の終焉ではない、散った花は谷の木に再び咲き、消えぬ雪となって庭に積むと歌う。それは27番の歌に「散る花を惜しむ心やとどまりてまた来む春の種になるべき」とあるように宗教的再生へと発展してゆく。こうして冒頭で把握した動的・行為的な考え方は時間的流転をともなつて永遠に生き続ける花にあこがれてゆく。西行上人集もまた同じである。これに対して巻尾百首の場合はどうか。1, 2は記したので3番目以下を記しておこう。

(3)人はみな吉野の山へ入りぬめり都の花にわれは止まらん

(4)尋ね入る人には見せじ山桜われとを花にあはんと思へば

(5)山桜咲きぬとききて見にゆかん人を争ふところとどめて

(6)山桜程なく見ゆるにほひかな盛りを人に待たれ待たれて

これらの歌を見ると、4首に共通する語として他人を示す「人」という語が詠みこまれている。どれも花の最盛期と思われる時期だが、いずれも第三者の行動を推測して、自分は別の行動をとっていることを詠み、それでいて花の盛りを暗に示しているようである。花の下にゆき、花に陶醉する昔の彼の面影ではない。冷静な明鏡止水に近い心境ではないか。そう思えば私は拾玉集にある西行と慈円の贈答歌を思い出す⁶⁾。それは、

「円位上人無動寺へのぼりて、大乘院のはなちでにうみを見やりて

には照るやなぎたる朝に見渡せばこぎ行跡の浪だにもなし

かへりなんとて、あしたの事にてほどもありしに、今は歌と申ことは思たえたれど、結句をばこれにてこそつかうまつるべかりけれとてよみたりしかば、ただにすぎがたくて和し侍りし

ほのぼのとあふみのうみをこぐ舟の跡なきかたに行ころかな」

がそれである。この作歌年時については諸説あるが、松野陽一氏は拾玉集のこの部分が詠作年時順に配列されているという観点から「文治5年7月から8月15日の間の作品と見做して間違いはない。」という考えかたをしておられる。文治5年といえは西行示寂の前年にあたる。ここで私がこれをもちだすのは二つの理由がある。一つは「浪だにもなし」、その一つは「今は歌と申ことは思たえたれど、結句をばこれにてこそつかうまつるべかりけれとてよみたりしかば」についてである。いいふるされた歌の類型としては「こぎゆく跡の白波」が考えられるが、ここでは全く跡かたもとどめないという断言である。それに呼応するように歌作りはもう断えてしまっているがこの歌をもって自分の結びの歌にしようというのである。つまり西行は晩年の程遠からぬ時期に作歌断念の宣言をみずからにしていることになる。その時期は明確ではない。この事実は重要な問題をもっているが今はこれに立ち入らない。ただこうした決意への道はおぼろげの道ではなかったろうことは想像に難くない。前記花十首の歌の中で、花に対する従来の自分を抑え、第三者としての人の行動を詠むという態度に歌を断つ心境に近づきつつあったのではないかと思うのである。花ゆえの緊張感を感じないといった方がよいかもしれない。

(7)花の雪の庭に積もるに跡つけじ門なき宿と言ひ散らさせて

(8)ながめつる朝の雨の庭の面に花の雪しく春の夕ぐれ

(9)吉野山麓の滝に流す花や峰に積もりし雪の下水

(10)根に帰る花をおくりて吉野山夏のさかひに入りて出でぬる

で花十首は終る。すべて落花に対する愛惜を歌う。出入する門のない家だと人に言い触らせるほど、踏みにじらせてしまう花を惜しみ、花は枝にこそないが庭にみごとに再生したと確認し、花は雪と変じて流れるという。まさに花の命の再生である。落花を惜しむ心が再生という別次元でとらえられる。(10)の歌に対しては大系本の頭注は和漢朗詠集閏三月にある藤滋藤の「花は根に帰らむことを悔ゆれども悔ゆるに益なし。鳥は谷に入らむことを期すれども定めて期を延ぶらむ」(春が暮れたと思って花は散ったが、閏で春がなお一月あると聞いて散り落ちたことを悔いても、もはやどうにもならない。鳥は……)と千載集巻二春下の崇徳院の「花は根に鳥は古巣にかへるなり春のとまりを知る人ぞなき」を挙げている。この崇徳院の歌は部類本久安百首の春下にもある。なるほど崇徳院の歌は「花は…鳥は」という点からも藤滋藤の詩を意識して詠まれたものと思うが、西行のそれはむしろ崇徳院の歌を念頭においたものと思われる。それは聞書集に

よしのやま雲もかからぬ高嶺かなさこそは花の根にかへりなめ

散る花も根にかへりてぞ又は咲く老こそはてはゆくへ知られね

とあるように根に帰ることを春の終りとし、人間の生涯の行末を根に帰るとみることによって宗教的再生を考えているとすれば、崇徳院の影響とみることが許されるのではなからうか。

こうした花十首から西行の心を推してみる。そこには花に陶醉し、積極的に行動をおこ

そうとする若さの表現よりも、花に数々の遍歴をした過去を豊かにもちつつけながら沈静した心で限らない愛着を花によせて、もはや宗教の世界に没入していこうとする姿勢ではなかろうか。到底この百首の成立が出家前とか、出家直後とかは考えられず晩年に近い頃、今まで詠んだ歌をも入れて編集したのではないかと思う。しかし残念ながらその根拠は何一つない。例えば述懐十首に、

いざさらば盛り思ふも程もあらじ貌^{はくや}姑射が峯の花に睦れし（1503）

山深く心はかねておくりてき身こそ憂世を出でやらねども（1504）

があるが、これらは明らかに出家前の作だろうし、

捨てて後は紛れし方はおぼえぬを心のみをば世にあらせける（1508）

は出家して間もない頃の作と考えられるし、

経りにける心こそなほあはれなれおよばぬ身にも世を思はする（1512）

と生き長らえている自身を何するととも甲斐なき身ながら世間への関心をもたざるをえない矛盾と悔恨をもって述懐十首を終えている。そうした各十首を経て百首最後の歌

細小蟹^{きさかに}のいと世をかくて過ぎにける人の人なる手にもかからで（1552）

と、権勢家の引き立てにもかかることなく思いどおりの生涯を生きた自負の気持ちで、塵つかで歪める道を直くなして、生き続けたことを、この歌に託して百首は終わっている。こう考えてくると、巻尾百首はかなり整然とした家集ではなかったかと思う。

5. おわりに

このような百首がなぜ山家集に組みこまれているのだろうか。山家集は作歌年時が入り乱れ統一した歌集とはいえない。例えば彼が西国へ旅したことは少くとも二度はあったといえる。一つは414番の歌でわかるように安芸一宮への参詣、今一つは1095番の歌によって四国への修行の旅、この二つと思われる。私の見るところでは安芸への旅はほとんど作歌していないようである。ただ、

むかし見し野中の清水かはらねばわが影をもや思ひ出づらん（1096）

むかし見し松は老木になりけりわが年経たるほども知られて（1145）

上は播磨の書写山へ参った折、下はこじまの八幡宮へ参った折に詠んでいる。この「むかし見し」の「むかし」が安芸一宮参詣の折と推定できる。詞書にも「一昔」とあるから10年とも17年とも21年ともいわれるが四国修行の旅がはっきりしているのでそれから逆算して35才から40才前後のことだろう。行程は舟路であったことは山家集の歌から推定される。中世における瀬戸内の航路は難波を出て室津へ、そこから牛窓へ、更に下津井、鞆を経る航路だったろう。とくに岡山県に限っていえば近隣の舟便としては鹿久居、新羅浦を経て牛窓へ、あるいは郡、唐琴を経て下津井へ、そして沙美を経て鞆へという舟便もあったが、いずれも、風待ち、潮待ちとして利用していたにすぎない。そう思うと四国修行の折には、室津で休んでいる時に書写山へ参って安芸行の昔を思い、牛窓で休んでいる時に八幡宮に

参って松の老木を再び見たといえる。山家集の四国修行の途次詠んだ歌はまことに不揃いである。そこで西行の歌に忠実に行路をたどってゆけば、牛窓で歌を詠んで下津井にて下船し児島、唐琴を経て渋川、日比へ、そこで四国への舟待ちの間に渋川、日比のこどもたちが釣する魚の歌をよんで四国へ渡ったものと思われる。ところが山家集の歌の配列はまず最初に讃岐での歌が先行し、ついで児島、渋川の歌となり、それらの歌よりかなり前にさかのぼって前記の「むかし見し」の歌がある。ついでながらいえば、「むかし見し」の歌は次のようになっている。

「西国へ修行して罷りける折、こじまと申す所に八幡のいははれ給ひたりけるに籠りたりけり。年経て又その社を見けるに、松どもの古木になりたりけるを見て

むかし見し松は老木に成りにけりわが年経たる程も知られて」(1145)

である。諸注釈書は文字通りこの地を倉敷市児島としている。思うに児島で詠んだのであれば、渋川、日比で詠んだ一連の歌と並列していたほうがよいし、「こじまと申す所」とあるから、かなり由緒深いところでなければならない。おそらくは、牛窓に碇泊して潮待ち、風待ちの合間に鹿久居島とか新羅浦を歩き、その若宮八幡宮にて詠んだのではないか。若宮八幡宮には今も舶載品が多く蔵されており、児島にはそれにふさわしい八幡宮は見当たらないようである。

西行は畿内を除くと陸奥に二度にわたって旅をし、西国にも同じく二度旅をしている。比較的に歌日記といってふさわしいのは初回の陸奥行くらいのもので、これとて順不同の個所もある。西国への旅はここに示したように讃岐への旅であるが、これも逆になったり、唐突に1首だけ出ていたりで順序は正確とはいえない。こうした山家集にあって、ただ百首だけが実に整然と構成されている。それを思うと、ある時期に、百首を作することを計画し、自分の過去において詠んできた歌を配列しつつ、現在たどりつつある宗教的心境を吐露してできあがったものではないだろうかと思う。そのある時期を明確にすることは到底できないが、聞書集の用語と百首のそれ、あるいは崇徳院の歌からみて久安百首と西行の百首との関係、俊成の皇太后宮大夫の時以後、更には西行の晩年の歌絶ちの前あたりを想定すれば、決して若い時分の作品とはいえないのではなかろうか。

注

- 1) 台記康治元年3月15日—1142—の条
- 2) 山家集 931 ほか参照
- 3) 勅撰集所載の西行の歌総数 266 首。これを分類すると春27首、夏8首、秋39首、冬18首、賀1首、哀傷13首、離別4首、羈旅15首、恋41首、雑84首、釈教8首、神祇8首となっている。
- 4) 佐々木信綱ら編西行全集による。
- 5) 国語と国文学 52巻9号 桑原博史氏による。
- 6) 国語と国文学 59巻1号 山田昭全氏による。

ON THE LAST ONE HUNDRED
TANKAS OF SANKA-SHU

Tadanao MURAI

*Department of General Education
Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1 Okayama 700, JAPAN
(Received September 27, 1984)*

In this treatise the writer deals with the last one hundred tankas of the Priest Saigyô's SANKA-SHU.

Comments on when Saigyô first made those tankas etc. have been given by many different students and poets. The writer does appreciate the excellent results of their work. Most of the comments, however, have been given from the critical or appreciative points of view and are still accepted as valid.

The writer doesn't wholly agree to their points of view. What the writer tries to do in this treatise is to interpret a particular tanka of the last one hundred in the light of what the Priest Saigyô meant to say by it, and further why the one hundred tankas were arranged as they are.